

トやボンベに学んだ外科医たちが幕末から明治維新に活躍し、彼らの経緯をたどると興味深い。

明治時代になると政府はドイツ医学の導入を決め、明治4年にはドイツ人の教師が東京大学に赴任し医学の教育にあたり、また主にドイツに留学し帰国した日本人の外科医たちにより外科が発展することになった。特にガス麻酔と消毒法が導入され開腹手術も行われるようになり、ドイツに学んだ東京大学教授の近藤次繁は1897年に胃癌に対する胃切除に成功している。

このように明治時代になってわが国は本格的にドイツ医学を導入したが、外科については江戸時

代後半には世界にひけ劣らないようなレベルにあったと言って過言ではなからう。

参考文献

- 1) アンブローズ・パレ没後400年祭記念会実行委員会 編著：日本近代外科の源流。メディカル・コア、1992年
- 2) 阿知波五郎：近代外科学の成立。日本医史学会、1967年
- 3) 呉秀三：華岡青洲先生及其の外科（復刻）。思文閣、1971年

（平成27年12月六史学会合同例会）

三重県の本草学者 丹波修治

河村 典久

丹波修治（にわしゅうじ）は、名は公憲、字は之翰で修治はその通称で、退翁、菅屋または清風と号した。文政11（1828）年6月15日に尾張国愛知郡前田一色（現在の名古屋市中川区下之一色）にて、木村和平の次男として生まれた。弘化3（1846）年、伊藤圭介の門下となり、本草学・蘭学を修めた。嘉永元（1848）年9月、伊勢国朝明郡大矢知村川北・丹波衛門（修平）の長女・つき子の婿養子となった。丹波家は代々地域医療の中心としてかかわってきたが、修治は医療よりも本草学者としての活動に重点を置いたようで、長男・玄一郎医師の早逝により、やむなく医師として医療にかかわった程度で、次女・徹子の婿養子・金永医師を得て、悠々自適の本草学者として本領を発揮することとなった。

丹波修治の業績としては、三重県における地方の本草研究者として活動し、明治5（1872）年 興国博覧会出品取調御用掛、明治9（1876）年の内国勸業博覧会の開催に当たり、三重県勸業課に出仕して県産物の調査を主管。明治14（1881）年、第2回勸業博覧会三重県物産取調嘱託となった。そして明治15（1882）年7月2日に、近隣の仲間

を集めて第1回交友社博物会を桑名浄土寺にて開催した^{1,2)}。博物会は年に2回の開催で、会員は当時としては珍しい鉱石や、植物、関連した資料などを多数陳列した。一方、師である伊藤圭介らが開催してきた尾張の博物会である『嘗百社』は、明治に入って圭介が東京に移りその活動を休止していたが、丹波修治は、明治22（1889）年3月20日、嘗百社を加え『北勢嘗百交友社』として統合し、同年8月1日に伊藤錦窠先生招聘博物談話会を開催して博物会を継承した。この博物会はその後明治35年11月9日の第31回まで続いた³⁾。そして、明治41（1908）年12月12日、81歳で病没した。丹波家の墓は朝明川近くの浄泉寺にあり、修治の戒名は『浄退院釋修知居士』とある。

丹波修治の輝かしい業績は、没3年後の明治44年に、朝明川堤防付近に記念碑として建立されており、その碑文には以下のような記載がある。なお、碑文の解説校閲は岩崎鐵志先生によるもので、句点を付した。

『丹波退翁碑』 丹波修治翁碑 錦雞間祇候貴族院議員従三位勲一等田中芳男篆額

翁名修治，字之翰，號退翁，尾張國愛知郡下之一色村木村和兵衛第二男，以文政十一年六月生，年過志學，入名古屋藩儒奧田鳳文門，修漢學，後就伊藤圭介，研究本艸，傍習蘭書，嘉永元年，爲伊勢國朝明郡川北村丹波衛門義嗣，無幾擢信樂代官所年寄役，七年六月，地震，朝明川堤崩壞，翁，拋私財，修理復舊，安政元年，爲庄屋役，翌年許帶刀稱氏，尋進大庄屋格，四年五月，大水朝明川潰，至七月又大浸，翁請怨藩，督課村民修築堤防，再復其舊，明治四年，藩廳有設學校于大矢知村之舉，翁應問，陳置和漢洋三部之議，任洋學部教頭，五年，官將送方物于澳國博覽會，翁應徵，東上奉命巡遊勢伊紀志尾濃六國，檢覈物産，三年，畢事，官賜金帛賞功，十年，官創開內國勸業博覽會，翁命三重縣勸業課出仕，尋任第五部審査官，四十一年十月，得病，十二月十二日溢焉逝，享年八十有一，葬于廣永村淨泉寺先塋之次，翁爲人温和，風采嫺雅，學邃本艸，傍善國歌，通茶儀，致仕之後，優游自適乎名利外，同好結社，每月相會品評珍異，鑒賞書畫，春秋二次陳列天産工藝，庶品廣供衆人觀覽，以爲第一樂事，晚年設國風會，誘掖後進，點茶挿苳並皆結社，以自娛兼教人，朝明郡人多解風雅，蓋翁之賜也，所著有本艸圖譜三重縣礦植物解説等若干部項，鄉右胥謀建碑，具狀乞余銘，余曾辱忘年交誼，不可辭，乃作銘曰

羣藝兼才 博物講學 拋官閑居 自樂厥業
嘉哉退翁 名實相若

明治四十四年七月 文學博士前田慧雲撰
津市 市川進書丹

丹波修治は、植物採集や研究を行う傍ら、多くの印葉図を作成した。印葉図とは植物の形を魚拓のように直接、あるいは拓本のように間接的に墨によってその形を忠実に紙に写し取ったものである。18世紀にドイツ人クニフォフによって作成された『植物印葉図譜』が一時期伊藤圭介のもとにあり、これを尾張本草学者の中で研究されて、尾張の得意とする技術となった。この図譜にはおよそ千種類の植物が収載されていたとされ、現存する写本はいずれも彩色されていないが、同時期に作成されたクニフォフの図譜が、現在国立国会図書館に収蔵されており、いずれも彩色されていることから、これらの図譜は、いずれも墨によって写し採ったものに彩色したものと考えている⁴⁾。

各地に所蔵されている丹波修治の印葉図譜のうち、国会図書館所蔵の「真影雑草之類七十一種」、「真影齒朶之類」、「本草真影 [本草真影巻之拾一]」、西尾市の岩瀬文庫所蔵の「菊池真影本草」、杏雨書屋所蔵の「於しば画 (安政5・1858)」、「本草真影残一卷」、三重県朝日町所蔵の「植物真影」を比較したところ、同時期に作成された印葉図であることが判明した。

【参考資料】

- 1) 浅井平一郎著 北勢博物学界の明星『丹波修治先生傳』孔版印刷物
- 2) 松島博：『近世伊勢における本草学者の研究 第八章 丹羽修治』（講談社）
- 3) 磯野直秀：日本博物学史覚え書 XV，慶應義塾大学日吉紀要・自然科学 No. 48，59-70（2010）
- 4) 河村典久：キニホフ『植物印葉図譜』の写本，伊藤圭介日記，第20集，217-234（2014）

（平成27年12月六史学会合同例会）

「義犬」の歴史と動物愛護史

小佐々 学

人によって最初に家畜化された動物は犬（イヌ）で、DNA解析などから犬の祖先は狼（タイリクオオカミ）とされている。文明・文化の起

源は「人の社会化」と「動物の家畜化」だと考えられており、人類にとって犬の家畜化は重要な出来事であった。犬は狩猟や番犬として「使役犬」